あｓ２０１６．１１．２６　大草

読書メモ

38．渡辺宝陽　「お経　日蓮宗」　講談社

39．山折哲雄　「霊と肉」　講談社

40.　ジョン・ミクルスウェイト他　「株式会社」ランダムハウス講談社

41.　梅原猛　「親鸞「四つの謎」を解く」新潮社

＜高橋靖　ミズノ　法務部長の論文についての私の所感＞

１．徳と法の関係を歴史的に考察した論文であり力作だが、難解である。

２．コンプライアンスの奥底に潜む思想・哲学について言及している。日本企業に共通なものと、世界に共通するものがあるのかどうかを考察している。

３．幅広い知識を駆使して、広範囲に亘り詳しく考察している。

４．この論文は、我々がやろうとしていることにかなり関係していると思う。一つのモデルともいえるのではないだろうか？

＜「現代日本人の宗教」柳川啓一より＞

この本では、現代日本人の宗教意識について、以下のように主張されている。

・仏教の場合、信者が守らなければならない５つの戒律がある。

①殺生するな

②盗むな

③女性と交わるな

④嘘をつくな

⑤酒を飲むな

これらは、日本に入ってくると、それほど重要視されなくなる。

お坊さんには百幾つかの戒律がある。しかし、日本のお坊さんは家庭生活を営んでいる者が多いので、女性と交わるなという戒律に重きをおかなくなった。明治以降、妻帯は正式に認められるようになった。（親鸞の影響では？大草）

また、殺生するなとあるため肉食はできないはず。これも緩んで明治以降、公認された。

「盗むな」は仏教徒でなくても当然として、「酒を飲むな」というのは、昔から戒律だという意識すら見られない。お坊さんの中には酒好きが非常に多い。あまり度を越して酒を飲んではならないという意味に解釈されてきた。本来、戒律というのは、いついかなる場合・場所でも厳守しなければならないものである。この観点からすると、日本の場合は、常識的な宗教の概念からかなりズレている。

一般の日本人は教義という信じるものを持っていないと言える。また、寺、教会、神社の所属メンバーであるという意識が薄い。また、厳守すべき戒律を持っていない。このために、信仰を持っているかと聞かれると「宗教は持っていません」と答える場合が多くなると考えられる。特に現代日本人は宗教を持つことをなかなか認めようとしない人が多い。

・しかし信仰率が３５％と低いのは、必ずしも「非宗教家」とか「脱宗教家」の傾向によるものではない。明治以前から、同じような信仰率であったといえよう。

⇒（大草意見）宗教は、意識しないうちに、心のどこかに芽生えてきているものと思う。宗教の意識は、社会、学校、家族などの環境下で自然に人が身につけてきたものではないだろうか。個人としての宗教がなくても親の代までの宗教はある人が多い。仏教形式での葬式が多いのはその表れと考える。

＜「神と仏」山折哲雄から。この本は神と仏の関係を平易に説明されており、面白い。＞

・日本で最初の焼身行。紀州那智の僧、応照は、時期が熟したとき、紙で作った法衣を着て手に香炉をとった。そして高く積み上げた薪の上に登って結跏趺坐し、西方に向かって諸仏を勧請し、こう言った。

「自分は心と体をもって妙法蓮華経に供養し、頭頂をもって上方の一切の諸仏に献じ、両足をもって下方の世尊に奉献する。背をもって東方の一切の諸仏に献じ、胸をもって釈迦に献じ、左右の脇をもって多宝世尊に施し、咽喉をもって阿弥陀如来に奉る。五臓をもって五智如来に献じ、六腑をもって六道の衆生に与えよう。こうしてすみやかに菩提をえたい。」

こう言い終わってから、彼は自分で薪に火をつけ、手に定印を結び、口に法華経を誦したという。修行僧も行き過ぎると、死を恐れず死を乗り越えて（死を意識しないで）即身成仏することを実践する者がでた。

(略)

入定はありえても、入寂という事態はあるべきではない。即身成仏した行の主体はどのようなことがあっても現実的な死の領域に足を踏み入れてはならない。

（略）

つまり、火生三昧による即身成仏の考えには、生の側から死の世界を想像する思考枠が欠如している。死の世界を生の延長として、そこに永生の極楽を想像するような感覚が欠けているのである。（大草：死なないで、生を継続していると理解するということか？）

(略)

こうして、真言行者における入我我入型の修行は、生体を聖体に合致させることによって、死の観念を徹底的に排除している。その点で法華行者における修行の型とは対立していると言えるであろう。

（略）

源信は大和の人で幼くして非凡の資質をあらわした。横川の秘境に籠って激しい修行に打ち込んだ。阿弥陀仏を無量遍となえ、法華経を一千部、般若経を三千巻、阿弥陀経を一万巻読誦し、さらに阿弥陀仏大呪を百万遍、陀羅尼を七十万遍、尊勝陀羅尼を三十万遍念じたという。しかし、源信は満足を得ることができなかった。

やがて、源信は、阿弥陀仏の仏号を称する念仏のみがすぐれているとの回心体験をえた。他の行を捨てて、もっぱら往生を願い、その常住坐臥の全てを極楽往生のためにのみ方向づけた。1017年、臨終を迎えた源信は、沐浴して身体の垢を洗い落とし、仏の手にかけられた糸をしっかり握り、頭北面西して念仏を唱えた。最後は眠るように息が絶えたという。

（略）

仏教における修行は、心身の鍛錬により、いかにして「仏」の境地に達することができるか、その可能性を追求した４種類の行がある。

１．法華経主義に立つ行

２．密教的な行

３．浄土教的な行

４．禅的な行

これらの行は、生体のコントロールを能動的・主体的に行う行為である。死の領域を意識的に拒否し、あるいは死と逆説的に交わり、あるいは死を生に変容させようとする行為であった。人間が仏と交わり、仏になろうとする試みは、人間と「神」との諸関係とは異なって、徹頭徹尾肉体という場面、生体という舞台において演じられるドラマであった。（観念的なもの、思想的なものではないという意味か？大草）神道的な世界観とは異なる仏教的な世界観の特質が見いだせるのではないか。

⇒（大草疑問）神道的な世界観と仏教的世界観とはそれぞれ何のことか？

（略）

時代が降るにつれて、神信仰や仏信仰が次第に変質し、やがて希薄になっていったことは否めない。しかし、希薄になっても無神、無仏の闇にのみこまれることはないであろう。（略）

本書の思考枠

・第一章：見えるもの（仏）と見えないもの（神）

・第二章：媒介するもの（神）と体現するもの（仏）

・第四章：祟り（神）と鎮め（仏）

⇒(大草)神と仏は相互友好関係にあり、お互いに補完し合ってきたといえる。本地垂迹説がその根本にあり、神の側から大きな反論がないために均衡を保っている。日常生活でも、神仏を明確に分けず、初詣や合格祈願は神社へ、病気回復や先祖供養は寺院で行っている。知らず知らずのうちに神や仏の戒律が日本人のDNAに刷り込まれているように思われる。

＜「日本とは何か」司馬遼太郎：山折哲雄対談から＞

司馬：つまりどこかの山に入って谷間を見てそこに一種の美しさとか、懐かしさ（懐かしさというのは千年前の懐かしさというような懐かしさ）を感じたりするという精神の中に、日本人の宗教感覚が入っているわけですからね。

そういう割合いい感じの宗教感覚を生して世界にひとつの調和を与えるーというと少しおこがましいのですが、、、。私たちは非常にシャイな民族ですけれどもそういう調和を与える役割を担うということをやってみたらどうだろうか。

交通信号は文明である。逆に文化とは日本でいうと婦人が襖を開ける時、両膝をつき両手で開けるようなものである。立って開けてもよいという合理主義はここでは成立しない。不合理さこそ文化の発光物質なのである。同時に文化であるがために美しく感じられ、その美しさが来客に秩序についての安堵感をあたえ、自分自身にも魚巣にすむ魚のように安堵感をもたらす。ただスリランカの住宅に持ち込むわけにはいかない、だからこそ文化なのであるといえる。（司馬さんは、文化とは不合理なものであるがそこに美意識や安堵感があるものという）

山折：文明の規矩は、やはりそれぞれの因果に規定されてくりだされるのであろう。司馬遼太郎氏が「明治」国で見出したプロテスタンティズムに通じるような道徳的緊張が新渡戸稲造の「武士道」に描かれた無私の精神、武士ではないが庄屋階層の人々が伝えてきた「人のためにせよ」という精神がかつては存在した。司馬さんは「次の時代なんかもうこないという感じが僕なんかにはあるな。ここまで闇を作ってしまったら、日本列島という地面の上では人は住んでいくでしょうけれども、堅牢な社会を築くということは難しい。ここまでブヨついて緩んでしまったら、取り返しがつかない」とまで発言している。政治家、官僚、ディベロッパーが**明治人の倫理**を忘れて私利私欲の行動をするようになってしまった。明治の精神はすっかり衰弱してしまっている。

⇒(大草)日本人の精神は、明治人に代表されるような社会に奉仕する利他にあると言っても過言ではなかった。ところが、戦後の経済成長一本の国家路線により、よき明治人の精神が忘れられてきたといえる。とはいうものの、１９９５年の阪神淡路大震災、２０１１年の東日本大震災時の国民の秩序正しい行動や相互扶助の精神が発揮され、諸外国から道徳の高さを絶賛された。これは、公共優先の精神が未だに日本人の心に残っていることを事実として世に知らしめたといえる。これは、コンプライアンスの大きく貢献する道徳や倫理が脈々として生きている証拠といえる。

＜「親鸞「四つの謎」を解く」梅原猛から＞

この本は、これまでの文献では、ほとんど取り上げられなかった「四つの謎」を親鸞の没年令となった９０歳の梅原猛が解き明かそうとした力作です。

１．なぜ９歳で出家したか

親鸞は日野一族と源氏の血統の尊い産まれであり、将来を嘱望された人材であった。

父は、日野有範、母は、源義朝の娘であり源頼朝の姉にあたる。当時、以仁王の乱(以仁王と源頼政が平氏打倒を企て失敗)がおこり、平氏は源氏の残党狩りに荒れ狂い、源氏の血筋にあたる親鸞も命を狙われる恐れがあった。これを避けるために、比叡山の慈円の下に出家させられた。

２．なぜ立身出世を捨て法然に入門したか

比叡山で卓越した僧であった親鸞は、慈円の下から法然の下へ移った。慈円は政治僧であり、源氏の天下では源氏の血をひく親鸞をかわいがったが、源氏が滅びたので親鸞を疎遠にしたことが背景にある。親鸞は「聖徳太子からあと十数年の命しかないお前は法然の下に行くことにより救われる」との第二の夢告を受けた。２９歳で法然に会い、浄土の教えを聞き感激して入門することにした。

３．なぜ戒律を破り妻帯をしたか

九条兼実は法然に肉食・妻帯の自分の様な者でも極楽浄土にいけることを証明するため、門下の僧に妻帯をさせて欲しいと依願した。法然はこの要請を受け、仏教の女性差別から男女平等の精神を貫くためにも、親鸞に妻帯を命じた。法然は妻帯者であっても極楽往生できることと女性も極楽往生できることを示す必要性を感じていた模様。

４．なぜ罪の意識が高かったのか

仏教では、５逆の罪人は極楽往生できないとされていた。５逆とは①故意に父を殺すこと②母を殺すこと③阿羅漢（智者）を殺すこと④仏身から血をだすこと（仏を傷つけること）⑤和合僧を破ること（教団を破壊すること）をさすが、親鸞は５逆の者も極楽往生できると説いた。その背景には親鸞の強い罪悪感があった。それは、親鸞の祖父の源義家は後白河法皇に命じられて保元の乱で負けた父源為義を殺した。この父親殺しの血をひくことが父親殺しの罪悪感と重なり、罪の意識が高かったという。

＜なぜ、人を殺してはいけないか、を考える＞

最大の禁止事項である殺人がなぜいけないかについて考えてみたい。これは、倫理や道徳がどこから生じてくるのかを考察する上で役立つものと思う。

以下のような、いろいろな理由が考えられる。

１．自分がイヤなことは、他人もイヤなのでしてはならない。

２．人間に自然から与えられた種を守るという本能である。

３．人は一人ではなく共同体に属する存在であり、共同体を維持するための秩序である。

４．共同体の構成員には、構成員として公共道徳を守るべき責任と義務がある。自分勝手な行動は許されない。

５．人には仏性が備わっており、倫理的行動をとるように予めセットされている。

６．道徳的であることが喜びに通じるため。

７．人は幸せに生きることを望み、不快なことをしたくない、人を殺して楽しい人はいないという前提で共同体に設けられたルール。

８．人は大切な存在であり、大切な人を傷つけてはいけない。

９．異なる共同体間でも人を殺してはならないという共通の道徳（＝倫理）がある。しかし、共同体間で戦争が起きた場合は、敵国の兵卒を殺しても罪にならない。道徳を超える論理がある場合があるがこれは例外である。

10．生物の種としての永続的な発展のためには、共通のルールが必要となる。このルールの一つが道徳である。

11．道徳は時代や環境変化の 影響を受けるが、どのような時代と環境変化があっても共同体において不変の原理がある。それが、根源的な道徳であり、殺人禁止はこの普遍的な価値である。

12．諸行無常というが、無常でない普遍のものがある。それが、普遍的基準であり、その一つの例が殺人禁止という道徳である。

13．戦争状態で敵国の兵卒の殺人は、国家から許された合法的行為であるがそれを否定する輩が出る。イエスや釈迦ある。この場合、イエスや釈迦は国家の方針を否定する秩序の破壊者として迫害されることになる。これは、道徳が変化したのではなく、一時的に殺人が正当化されたにに過ぎない。大義のための殺人は許されるなら、殺人犯が次の殺人を犯す前に殺すことは正当化できる。だが、殺人が道徳に反するという、普遍的な価値の変更には当たらない。

一方で、殺人を正当化する理由も考えてみたい。

１．戦争では、敵国の兵卒を殺すことは称賛される。

２．極悪人は犯罪をおかす前に殺してもよい。

３．自分は殺されてもよいと思っているので、人を殺して何がいけないのか。

４．刑法で死刑制度がある。（極悪犯は、国が殺すことを認めている）

５．歴史上の偉人は、多量殺人者の側面をもつ。大量殺人がいいなら、1人２人殺してもかまわないのではないか。

６．なぜ殺人がいけないのか分からない。誰も説明してくれない。なぜいけないのかが証明されておらず、分からない以上、殺してもよいと考える。

７．大義のために行う殺人は許されている。

殺人がいけない主な理由は、次の３つと私は考える。

１．同じ共同体の中で、その共同体を永続的に維持していくために生まれたルール。

そのルールは自然発生的でもあり、人為的なものでもある。

２．社会等の変化に応じて変化するものもあるが、殺人はいかなる環境変化

時代変化があっても不変の普遍的な禁止事項である。

３．殺人をして楽しいと感じる人はいない。（いたらその人は精神異常者である）

＜「株式会社」から＞

株式会社の起源から今日に至るまでの歴史と今後の在り方について書かれている。（未読）

（略）

会社の会社による会社のための経済活動なのであり、人間が疎外されている！

以上